G-COE GLOPE II

制度構築の政治経済学
－期待実現社会に向けて－

Political Economy of Institutional Construction: Toward an Expectation - Realizing Society

News Letter: G-COE GLOPE II, No. 16, December, 2012

巻頭言

GLOPE II 2012 年度 最終国際シンポジウム にむけて

G-COE GLOPE II 拠点代表者

田中 愛治

CONTENTS

1．巻頭言： GLOPE II 2012 年度最終国際シンポジウムにむけて
2．国際シンポジウム開催のお知らせ
3．2012 年度 OAPS 授賞式
4．連載：世論調査でみえること
－ GLOPE・GLOPE II の調査データから
「第 10 回：有権者は候補者の名前を知っているのか？」

本拠点「制度構築の政治経済学」（GCOE-GLOPE II または単に GLOPE II と略称）も本年度が最終年度となり、我々 GLOPE II のメンバーは現在その教育研究活動の集大成に向けて進んでいる。本拠点は政治学と経済学の融合を目標に掲げて、本拠点の前身で 2003 年度～ 2007 年度の期間に活動を展開した 21 世紀 COE「開かれた政治経済制度の構築（21COE-GLOPE）」拠点（拠点リーダー：藪下史郎教授）を引き継ぎ、2008 年度から今年度（2012 年度）末迄の 5 年間にわたって教育研究活動を行ってきた。本拠点の目的は、政治学的な視点を持った経済学分析もしくは経済学的視点を持った政治学分析を行うことができ、かつ国際的な競争力を持つ博士後期課程の大学院生を育成することであった。ここでは、本拠点のこれまでの 4 年間半の教育研究活動を振り返り、これまで何が達成できたと考えられるのか、また最後の半年間の残りの期間に達成すべき課題の一つである最終国際シンポジウムの開催の趣旨を述べておきたい。

本拠点の前身である 21COE-GLOPE では、政治学と経済学の方法論的融合を達成できたと考えている。2003 年度に研究教育活動を開始した当時は、政治学者と経済学者の間でのコミュニケーションも十分に成立せず、同じ用語（たとえば「理論」という用語）でも意味するものが異なっているような場合が多かった。その政治学と経済学の間の溝を徐々に埋めながら、教員同士も院生同士も政治学と経済学の境界領域を超えて議論をしてきたことが、政治

経済学という新たな学問体系の理論の確立には至らなかったものの、政治経済学における分析の方法論的な相互理解と融合は達成できたと考えている。

21COE-GLOPE における方法論的融合は、 4 つの側面において果たしたと言えるだろう。第 1 に、従来から経済学の分野に確立されてきている政治経済現象を（ゲーム理論を用いて理論的な視点から分析する）経済学的な方法で分析するアプローチを、政治学の大学院生が学びとってきたことにより、政治学的な仮定（assumption）や概念を導入することによって、方法論的な融合を高めた。第 2 に、規範理論的な視点においては、経済学の社会選

択理論（social choice theories）と政治学的な規範理論（normative political theories）の融合が進んだ。第３には、実験の実施を通して経済学実験と社会心理学的および政治学的な実験の融合を進め「政治経済学実験」と呼ぶべき形を確立できた。第４には、その政治経済学的実験の要素をCASI調査（Computer Assisted Self-administered Interviewsーモバイル・コンピュータを用いて対面で行う世論調査）に導入することによって、政治学と経済学の方法論的な融合を推進できた。

2008年度に発足した本拠点（GLOPE Ⅱ）においては、以上述べたような21COE-GLOPEにおける方法論的融合を基礎に、さらに大学院生によって、また担当教員たちによって政治学と経済学の理論的な融合が進められた。特筆すべき新たな仕組みは、「火曜セミナー」と「ランチタイムセミナー」であった。火曜セミナーは、毎週火曜日の２時限目にGLOPE Ⅱにかかわる教員と院生が４つの班に分かれて、様々な教育研究活動を展開した。英文の論文の輪読会や院生の研究報告、実際に問題を解く演習など様々な形を取ったが、４つの班に分かれて政治学と経済学の院生と教員が入り混じって議論をし、新たな政治経済学とは何かを模索してきた議論の場であった。その４つの班分けは、現経済学研究科長の須賀晃一教授が院生との集中的な討議を経て、それまでのグループ分けを2009年春に再編する提案をしてくれたものであり、それを教員と院生全員で合意して本格的に開始した。

４つの班は次のとおりであるが、矢印の後に示した通り、近年は各班ともに、火曜セミナーの発足当初よりもやや広い学問領域を示し、より明確にそのグループの特徴を示す名称を用いるようになった。その結果、（１）グループ１: 実験・世論調査・統計分析→「実験・調査班」、（２）グループ２: 持続可能な制度設計と規範的評価→「規範理論班」、（３）グループ３: 国際政治経済モデル分析→「政治経済分析班」、（４）グループ４: 制度の生成と設計の数理的基礎付け→「数理政治経済理論班」といったグループ分けによって４つの班が活動を展開してきた。各班をリードする教員は以下の通りである。（１）実験・調査班は、船木由喜彦教授と日野愛郎教授であり、渡部幹准教授と清水和巳准教授および筆者(田中愛治)が適時参加している。（２）規範理論班は、須賀晃一教授と河野勝教授、および清水和巳准教授がリードしている。（３）政治経済分析班は故・清野一治教授が始め、小西秀樹教授が引き継いで指導してきた。（４）数理政治経済理論班は永田良教授（前経済学研究科長）が本拠点の設置当初から一貫して指導してきた。

また、火曜セミナーも１学期に１～２回は全体会として４つの班の合同の授業にしてきたが、毎週火曜日の昼休みは、ランチタイムセミナーとして必ず全員が一同に会して、外部からのゲスト・スピーカーか本拠点の大学院生が報告してきた。これらの活動以外にも、各班や各教員が企画してきたワークショップは随時開催されてきており、本拠点ではおもに大学院生の提案や創意工夫によって活発に教育研究活動を展開してきたといえる。

この５年間の、いや21COE-GLOPEからの10年間の活動の集大成として、本年度(平成24年度)の最終の国際シンポジウムを２日間にわたって開催する予定である。来る2013年１月12日(土)・13日(日)に開催を予定している最終年度国際シンポジウムの趣旨を、ここで簡単に述べておきたい。

この最終国際シンポジウムは、河野勝教授の企画で２日間にする予定で準備を進めている。第１日目はこれまでの各班の教育研究活動の集大成として、本拠点の期間終了直後に刊行する予定の政治経済学の理論的融合の現時点での成果を示す著作(河野勝教授編集の論文集の予定)の完成にむけての最終的な議論の場とする予定である。外部からお招きする西條辰義教授(大阪大学)と盛山和夫教授（関西学院大学）のお二人に討論者をお願いして、本拠点のメンバーで最終の論文集の執筆陣の報告にコメントをいただき、実質的な議論を深めたい。この第１日目の会議は、政治経済学の理論的融合を目ざしてきた教育研究活動の集大成としての論文集執筆のために議論を深める場としたい。そのために、本拠点のシンポジウムとしては開設以来初めて報告も討議も日本語で行うこととした。

最終国際シンポジウムの第２日目は、本拠点の伝統にのっとり、国内外の本拠点の活動に関心の高い方々に対して完全にオープンにし、英語での講演、報告と討論、質疑応答としたい（英語・日本語の同時通訳付き）。このシンポジウムでは、講演を河野勝教授にお願いし、本拠点の最大の目標である「政

治学と経済学の理論的融合」がどこまで達成できたかと、残された課題についてお話しいただき、西條辰義教授、盛山和夫教授には前日の議論を踏まえてご報告をいただき、更に海外からマイケル・トムズ（Michael Tomz）・スタンフォード（Stanford）大学教授とチャールズ･ノゼア（Charles Noussair）･ティルバーグ（Tilburg）大学教授をお招きする。このお二人にも、本拠点とその前身の拠点を併せて過去10年間の活動と、最後の集大成に向かう我々の現状について、その意義と課題をそれぞれのご専門のお立場からご報告いただく予定である。

本拠点に関わってきた、もしくは積極的に参加してきた早稲田大学のメンバー、また過去に本拠点に関わっていたことのある卒業生、ならびに過去10年間に本拠点の活動に関心を持って関わってくださった全ての方々には、この最終シンポジウムには是非ともお越しいただきたく、積極的なご参加をお願いしたい。この最終国際シンポジウムへの皆様のご参加を重ねてお願いする次第である。

国際シンポジウム "POLITICAL ECONOMY of INSTITUTIONS and EXPECTATIONS IV" 開催

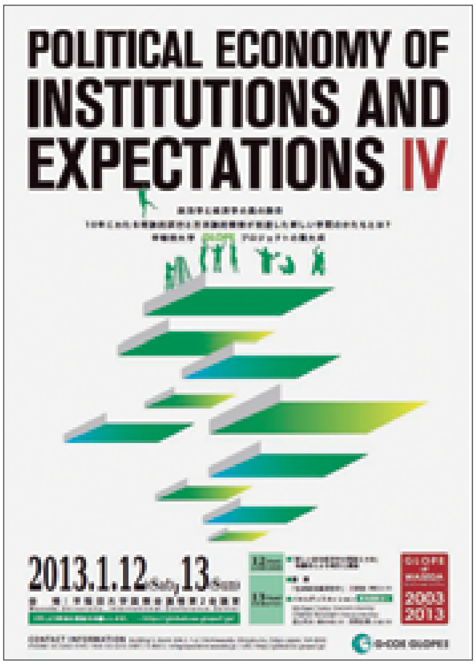
個人や集団の行動は、現在・将来の生活や他者の行動について自らが抱く願望や予想—期待—に影響されます。そして、そうした期待の形成は、社会で許される行動規範･ルール—制度—により促進･抑制されます。もし制度が人々の期待に応えられないと、制度は機能不全に陥り、その結果、人々の制度への期待がさらに減退するという悪循環が生じるでしょう。われわれは、このような悪循環を断ち切り、人々に期待実現の機会をより多く提供できる社会—「期待実現社会」—が備えるべき条件を明らかにしたいと考えています。

本拠点では、文部科学省から2003年に21世紀COEとして、そして2008年に引き続きグローバルCOEとして採択され、政治学と経済学とを融合し、新しい政治経済学を築こうと試みてきました。その集大成をこのシンポジウムにて、ご報告させていただきます。

（「POLITICAL ECONOMY of INSTITUTIONS and EXPECTATIONS IV」リーフレットより）

日時：2013年1月12日（土）・13日（日）
場所：早稲田大学国際会議場第二会議室
使用言語：日本語・英語（同時通訳あり）

※シンポジウムの詳細につきましては下記GLOPE2ウェブサイトをご参照下さい。参加登録も受け付けております。
http://globalcoe-glope2.jp/sympo/20130112.html



2012 年度 OAPS 授賞式

OAPS（the outstanding academic papers by student project）は、主に博士課程に在籍する若手研究者の学問的交流を目的とした国際プロジェクトである。GLOPE Ⅱは2010 年からこのプロジェクトに参加しているが、この度、GLOPE Ⅱ助手で本学経済学研究科後期博士課程在籍の田場弓子氏が OAPS の優秀論文に採択された。香港城市大学で実施された授賞式の様子を紹介する。

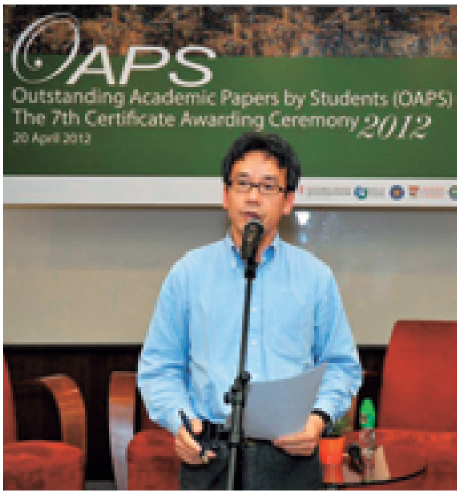
香港城市大学訪問

早稲田大学政治経済学術院教授
河野　勝

４月２０日に香港城市大学で行われた OAPS の授賞式に参列した。GLOPE Ⅱとして関わりはじめて、今年で３年目である。（GLOPE Ⅱ助手である田場弓子さんを含む）受賞者のみなさんを前にして、どういうわけか私がお祝いのスピーチを行う役を命ぜられ、どうやら恒例行事であるらしい「習字」もした。

ちなみに、OAPS とは、the outstanding academic papers by student project の頭文字をとったもので、それは早稲田や香港城市のみならず、いまやかなりの数の大学を結ぶ国際的なコンソーシアムとして行われている。受賞作品は、オンラインでダウンロードできる。最近はここに掲載されている論文が、多くの国の研究者の論文の中で引用されたり参照されたりする例が増えている、という報告があった。今後、（GLOPE Ⅱが終わったあと）早稲田が大学として、このように軌道に乗りつつあるオンラインジャーナルとどう関わり、その発展にどう貢献していくべきか、図書館の方々や国際課と連絡をとりあって考えていく必要があろう。

さて、ホストである香港城市大学は、授賞式への参列だけでなく、いろいろと心配りをして、われわれの香港訪問をもてなしてくれた。大学の図書館ツアー、ビデオによる大学の紹介、政治学の教授であ



る Linda Chelan Li 先生との面会、そして OAPS のそもそもの推進者で、故清野一治教授の友人 Eden Yu 先生との面会。

なかでも、私がとても深い印象に残ったのは、田場氏と私とをランチに連れて行って下さった Rita Wong さんであった。彼女は、すでに違う大学の図書館員の職から引退した方であったのに、この香港城市大学の図書館から乞われて、「相談役」として勤めている方である。きっとライブラリアンとしては卓越した才能をお持ちであるにちがいない。ご主人は、もともとは学者で、後に香港議会の議長まで勤めた政治家である。しかし、そんな凄腕の人というか、名士であるにもかかわらず、Wong さんの物腰やしゃべり方は、とてもおっとりとしていて、われわれ二人を本当に暖かく、優しく迎えてくれた。日本の温泉が好きで、よく日本を訪れること。ご主人が翻訳している唐の時代の詩のはなし。そして日本人と中国人の宗教観の違い。次から次へと出てくる「飲茶」にのって、次から次へと移り変わる話題で、楽しい会話がはずんだ。交流というのは、このようにして、人と人とがじかに接して行わなければ、深まらないのである。

残念ながら、訪問中は、連日雨が降り続いていたが、ときおり晴れ間がのぞいた。香港の人たちが自慢する夜景も、少しだけ見ることができた。

OAPS 受賞式に参加して

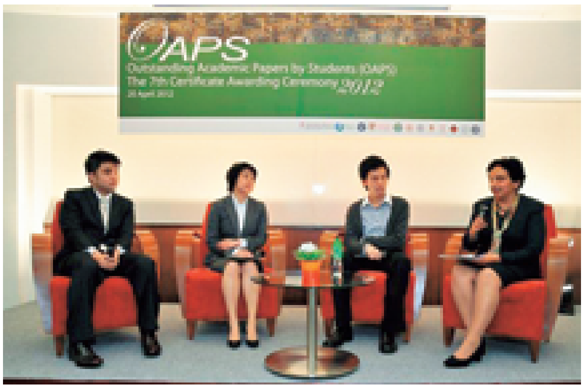
早稲田大学経済学研究科
GLOPE Ⅱ助手・後期博士課程
田場　弓子

去る 4 月 20 日、香港城市大学で行われた OAPS の授賞式に列席した。この賞は、香港城市大学図書館が主催となり、毎年、香港城市大学と提携している世界数十ヶ国の大学、香港城市大学、早稲田大学から数人の学生に贈られている。今年は、いろいろな偶然が重なり、私の論文 “State Trading Enterprises vs. Trade Policy for Targeted Policy Objective – Large Country Case - ” が採択された。まだまだ完成に程遠い論文に、このような賞をいただけたのは、ひとえに早稲田大学 GLOPE Ⅱに関係している先生方のおかげである。この場を借りて御礼申し上げます。

本論文は、国家貿易機関による貿易管理と補助金支出の財源問題に注目した規範的な研究である。通常、国家貿易機関は、生産者を保護する目的で政府から多くの補助金を受けているが、年々その補助金支出、特に農業部門への補助金支出が政府の財政を圧迫している。そのため、補助金の財源をどう確保するかが多くの国々で課題となっている。本論文では、政府がある価格（または数量）水準を実現するとき、補助金を受けない、つまり、予算が均衡するように消費者価格（数量）を決定するような国家貿易機関を仮定し、同水準の価格（数量）を実現する輸入関税との社会的余剰への影響を比較した。その結果、目標価格（数量）の水準によって、国家貿易機関による目標達成が望ましい場合があることを示した。

授賞式では、まず、早稲田大学河野勝先生のお祝いスピーチがあり、ペンシルバニア大学の Dr. Vedantham 氏の進行で行われた。異なる分野から私を含め 4 人の受賞者が、研究の概要や研究過程で直面した困難をどのように克服したのかなどについて短いスピーチを行った。受賞者の研究には、アイディアに富んだ IT 技術の開発などもあり、とても刺激を受けた。短い時間の授賞式だったが、受賞者以外にも多くの先生方や学生などが参加しているようであった。

授賞式当日は、香港城市大学図書館主催ということもあって、図書館内を案内していただき、検索システムなどの説明があった。図書館内は、中国の伝統的な建築様式を取り入れた明るく開放的な雰囲気で、自動貸し出し装置や利便性の高い検索システムが備わっていて、研究しやすい環境が整っていた。そこで、河野先生と私は書道をし、記念に大きな印鑑をいただいた。図書館委員の方々は、私たちの滞在中には、ホテルへの出迎えから夕食に至るまで、手厚い歓迎をしてくださった。一番驚いたのは、昼間は学生でいっぱいだった食堂の奥には、大きな中華料理専用の丸テーブルがおかれ、学校内にも関わらず、本格的な中華料理を堪能したことである。食事中には、図書館職員でもあり、経済学者でもある Dr.Ching 氏から、ご自身が経済学者から図書館職員となった経緯や、中国へ返還された後の香港経済などについてのお話を伺った。私たちの滞在中、手厚い歓迎をしてくださった香港城市大学の図書館員の皆様に感謝いたします。



★ OAPS の概要や 2012 年受賞式の様子などについては、香港城市大学内のウェブサイト（下記）で閲覧することができる。写真はウェブサイトで公開されているものを、許可をいただいた上、転載した。
OAPS ウェブサイト（香港城市大学 HP 内）
http://www.cityu.edu.hk/lib/about/event/oaps_cer2012/oaps_cer2012_announce.htm

連載：世論調査でみえること
― GLOPE・GLOPEII の調査データから
第 10 回：有権者は候補者の名前を知っているのか？

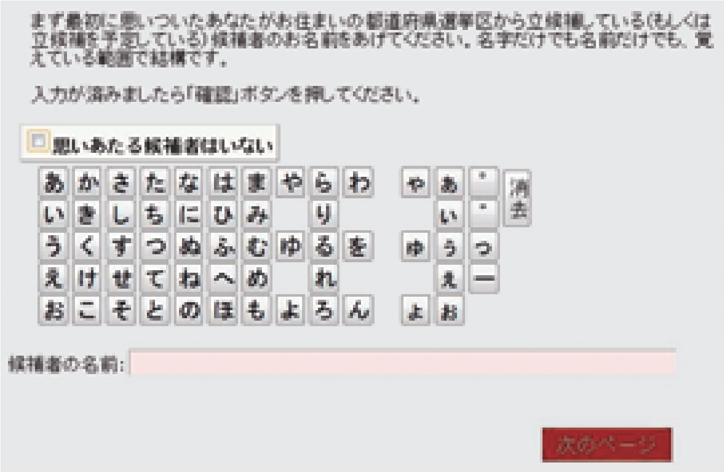
GLOPE Ⅱ助手
細貝　亮

この原稿を書いているのは、まだ 46 回衆議院選挙の選挙運動期間中である。運動期間に入ってから、候補者のポスターが貼り出され、家には選挙公約を記したビラが届き、候補者の名前の連呼を聞く機会も増えた。多くの情報に囲まれながら、しかし実際のところ、私たちはどの程度候補者について知っているのだろうか。もっと言うならば、私たちは、そもそも候補者の名前を知っているのだろうか。

GLOPE Ⅱと読売新聞社が 2010 年参院選にあわせて共同実施した「日本人の社会的期待と選挙に関する世論調査」には、調査対象者に、知っている候補者の名前を自由回答形式で挙げてもらう質問がある。質問は「あなたがお住まいの都道府県選挙区から立候補している（もしくは立候補を予定している）候補者のお名前を教えて下さい。」というもので、最大 8 人まで回答可能である。実際の回答画面が図表 1 である。

回答者はタッチペンによって候補者の名前を入力する。だが回答者は、候補者の名前をフルネームで覚えているとは限らず、苗字だけしか答えられないかもしれない。また回答した候補者名が間違っている場合もあろう。これらの点を考慮して、回答を分類した結果が図表 2 である。まず、回答のあった候補者名は、その正確性を基準に、図表の通り 6 つに分類される。完全に名前が挙がった候補者（A）が延べ 235 人、不完全でも名前が上がった候補者（B ～ D）が延べ 501 人であった。ここから有権者は、候補者の名前を完全に記憶するよりも、その一部（大抵苗字である）を憶えている場合が多いと分かる。

次に、有権者は候補者の名前を平均何人位挙げることができるものなのだろうか。上記したように、候補者の氏名は完全なものと一部だけのものと混在しているので客観的に数量化することは難しいが、ここでは差し当たり A を 1 点、B ～ D を 0.5 点として得点化（これを本稿では挙名得点と呼ぶ）し、その結果を図表 3 と 4 にまとめた。まず指摘すべきことは、たとえ不完全でも候補者の名前を挙げることができた回答者は 1433 人中 454 人であるという事実だ。すなわち回答者の約 6 割は調査の時点で候補者の名前をひとりも知らなかったということになる。挙名得点別の回答者数をグラフ化するとより明確にこの特徴が見て取れる（図表 4）。全回答者得点の平均は 0.33 であり、やはり無回答の多さを反映



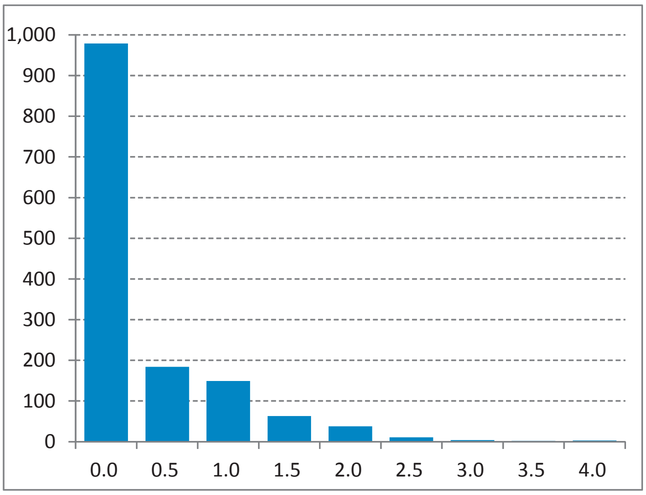
図表 1：候補者自由回答画面

	分類基準	候補者挙名人数	挙名得点
A	候補者の苗字と名前の両方が記入されかつ正しい	235	1
B	候補者の苗字・名前のいずれかが記入されかつ正しい	398	0.5
C	候補者の苗字と名前の両方が記入されているが一部に間違い	50	
D	候補者の苗字・名前のいずれかが記入されているが一部に間違い	53	
E	候補者の名前ではない	5	0
F	その他	10	

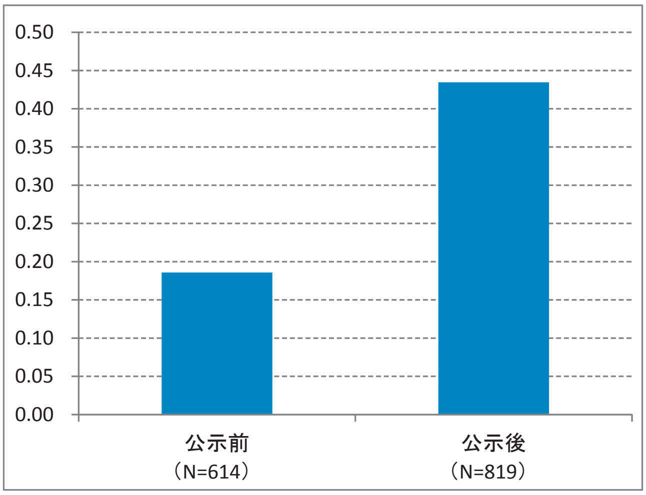
図表２：候補者氏名の分類

ひとりでも候補者名を挙げられた回答者数	454/1,433人
平均得点	0.30
最低得点	0.00
最高得点	4.00
標準偏差	0.60

図表３：挙名得点の記述統計



図表４：挙名得点別の回答者人数
（横軸：挙名得点、縦軸：回答者人数）



図表５：公示前後の平均挙名得点
（縦軸：平均挙名得点）

している。最高得点は４点、候補者の氏名４人を完全に書けた回答者が３人いた。

挙名得点が高い有権者は、一般に政治関心、教育程度、政治知識が高い傾向にあるが、その他にも重要な要素を考慮しなければならない。世論調査の面接日である。2010年参院選の公示日は６月24日、投票日は７月11日であり、世論調査は６月18日から７月10日の間に実施された。すなわち、正式な候補者が出揃う公示日の前に面接調査を受けた回答者がいることになる。現実として公示日前には、候補予定者はほとんど明らかになっていたとはいえ、公示前と公示後ではやはり候補者の認知度には違いがでるに違いない。当然、公示前よりも公示後に調査を受けた回答者の方が、候補者について正確な知識を持っているはずである。上記の平均得点を公示前・公示後に分けてグラフ化したものが図表５である。予想通り、公示以前と比べて、公示後の平均挙名得点は２倍以上になる。これは有権者が、公示後の情報によって候補者の名前を学習したためと考えられる。

とはいえ、総じて有権者は候補者の名前をあまり知らないと言える。もっとも、候補者の名前を憶えていないことそれ自体は、大きな問題ではないのかもしれない。候補者を識別するには、所属する政党が分かっていれば事足りるのかもしれないからだ。それでは、候補者の名前を正確に言えるということは何を意味し、政治意識や投票行動とどう結びついているのか。今後、実証研究を進めてゆきたい。

G-COE GLOPE II
事業推進担当者

田中　愛治	政治学研究科	教授
藪下　史郎	経済学研究科	教授
鈴村　興太郎	経済学研究科	教授
須賀　晃一	経済学研究科	教授
船木　由喜彦	経済学研究科	教授
清水　和巳	経済学研究科	准教授
河野　勝	政治学研究科	教授
石井　安憲	経済学研究科	教授
秋葉　弘哉	経済学研究科	教授
永田　良	経済学研究科	教授
飯島　昇藏	政治学研究科	教授
弦間　正彦	社会科学研究科	教授
久米　郁男	政治学研究科	教授
戸田　学	社会科学研究科	教授
上田　貴子	経済学研究科	教授
川岸　令和	政治学研究科	教授
坂野　慎哉	商学研究科	教授
小西　秀樹	経済学研究科	教授
日野　愛郎	政治学研究科	准教授

早稲田大学 G-COE GLOPE II オフィス

〒１６９－８０５０
新宿区西早稲田１－６－１
早稲田大学早稲田キャンパス１号館３０８－２号室
TEL 03-3202-5193 FAX 03-5272-3481
E-MAIL: infoglope2@list.waseda.jp
URL: http://globalcoe-glope2.jp/